手をつないで眠ったら

伊藤貴晴　作

【登場人物】

女１　男１の妻　二条の后　大和の女　伊勢の斎宮

女２　飛ぶ女　在原業平

女３　高安の女

男１　女１の夫　語り手

男２　鬼　友人

男３　鬼　友人

男４　鬼　友人

男５　鬼

【１】

アパートの四階の一室。女１がいる。男１がソファーで眠っている。

女２が窓の外に現れる。

女２ とんとんとん

間。

女２ とんとんとん。いませんか？

間。

女２ とんとんとん。開けて下さい

女１ 誰？

女２ 私

女１ 誰？

女２ 開けて

女１はカーテンを閉める。

女２ ちょっと、ひどいよ。何で閉めるのよ

女１ 誰よ、あなた

女２ 開けて

女１ 誰だって聞いてるでしょ

女２ 開けてよ

女１ 嫌

女２ 開けなさいよ。でないとこの窓叩き割るわよ

女１はカーテンを開け、窓の鍵を開ける。女２が入ってくる。

女２ お腹空いた

女１ あなた、誰？

女２ お腹空いた

女１ 変な名前

女２ そんな名前じゃないよ

女１ じゃあ何？

女２ これ誰？

女１ 私の旦那

女２ 寝てるね

女１ うん

女２ よく寝てるね

女１ うん

女２ 顔に落書きしてもいいかな

女１ ダメ

女２ じゃあ何か食べさせてよ

女１ 嫌だ

女２ どうして？

女１ どうして？

女２ じゃあ飲み物

女１ 水でいい？

女２ 温かいのがいい

女１ お湯でいい？

女２ 味がついてる方がいい

女１ コーヒーでいい？

女２ コーヒー嫌い

女１ じゃあ飲まなきゃいいでしょ

女２ 他に何かないの？

女１ 牛乳

女２ 牛乳嫌い

女１ 出てって

女２ カフェオレにして

女１ コーヒーも牛乳も嫌いなんでしょ？

女２ カフェオレは好き

女１ コーヒー牛乳か

女２ カフェオレ

女１は飲み物の用意をする。

女２ いい天気だね

女１ うん

女２ いい眺めだね

女１ うん

女２ あ、飛行機

女１ 砂糖いくつ？

女２ ひとつ

女１ 甘い方がいいんじゃないの？

女２ 大丈夫。できた？

女１ まだ

女２ まだ？

女１ まだ

女２ 何してるの？

女１ 牛乳温めてるの

女２ 牛乳って温めると膜ができるよね

女１ うん

女２ あれ、何か気持ち悪いよね

女１ そう？

女２ 指を入れるとさ、指にくっつくの。ぐるぐるってすると、ぐしゃぐしゃって。で、口に入れると変な味がするの。だから牛乳嫌い

女１ そういうことしてるから嫌いになるんじゃないの？

女２ 嫌いな人に投げつけて遊ばなかった？

女１ 何を？

女２ 牛乳の膜を

女１ そんなことしなかった

女２ ぐるぐる、ぺちゃ。ぐるぐる、ぺちゃ

女１ それ、いじめじゃん

女２ いじめじゃないよ。私の意思表示

女１ 意思表示？

女２ 私はあなたが嫌いですっていう意思表示

女１ もっと別の方法考えた方がいいんじゃない？

女２ そう？

女１がコップを二つ持って戻ってくる。

女１ どうぞ

女２ ありがとう

二人はカフェオレを飲む。

女２ おいしい

女１ そう？

女２ うん。こんなおいしいの初めてかも

女１ インスタントだよ

女２ うん

女１ コーヒー嫌いなんでしょ？

女２ うん、おいしい

女１ そりゃどうも。でさ

女２ 何？

女１ あなた、何者？

女２ えへへ

女１ 何？　気持ち悪い

女２ 私たち、いい友達になれると思わない？

女１ え？

女２ そう思うでしょ？

女１ いきなりそんなこと言われても

女２ そう思わない？

女１ 思わない

女２ どうして？

女１ だって、どうして知らない人と友達になれるの？

女２ 知らない人？

女１ 知らない人

女２ 知ってるよ

女１ え？

女２ ほら、今、会ったから。知ってる人

女１ 何それ？

女２ ほら、友だち

女１ 子どもじゃないんだから

女２ いいじゃない

女１ あなた、何しに来たの？

女２ 何しに？

女１ うん

女２ 内緒

女１ どうして？

女２ 女はね、秘密があった方が魅力的なんだよ

女１ へえ

女２ 謎の少女みたいで格好良いでしょ

女１ 別に格好良くない

女２ 格好良いって言ってよ

女１ 嫌。大体、少女って年でもないでしょ

女２ それ、ひどくない？

女１ 名前は？

女２ 内緒

女１ 職業は？

女２ 内緒

女１ 住所は？

女２ 秘密

女１ ホームレスなの？

女２ 違います

女１ 何で教えてくれないの

女２ 秘密だから。スリーサイズも秘密だからね

女１ それは聞いてない

女２ 何よ、脱いだらすごいんだから

女１ どうすごいの。爆発したりするの？

女２ 違うよ。何だと思ってるの？

女１ わからないから聞いてるんでしょ

女２ お互いのことは話してるうちに段々わかってくるんだから

女１ 何にもわからない

女２ そんなことないよ。人間性っていうのは会話の中に見えるんだから

女１ 人間性ねえ……人間？

女２ 当たり前じゃない。何だと思ってるの？

女１ 確認です

女２ ふーん

女１ お腹が空いてるんでしょ？

女２ うん

女１ で、食べ物を恵んでもらいにここへ。ホームレス？

女２ 違います

女１ コーヒーが嫌いなんでしょ？

女２ うん

女１ 牛乳も嫌いなんでしょ？

女２ うん

女１ 好き嫌いが多いと大きくなれませんよ

女２ ほっといて

女１ 後、わかるのは、わがままで傍若無人で妄想癖があって非常に自己中心的で自分勝手でわがままだってことかな

女２ 何でわがままって二回言ったの？

女１ わざと

女２ 性格悪い

女１ よく言われる

女２ 私そんなにわがままじゃないよ

女１ 嘘つき

女２ 本当だよ

女１ わがままで嘘つき。そんな人とは友だちになれません

女２ 私だって、お腹が空いてるのに何も食べさせてくれない人とは友だちになれません

女１ あんたは犬か

女２ 犬じゃないよ

女１ バカじゃないの

女２ バカって言わないでよ

女１ だってバカじゃん

女２ こんな性格の悪い人とは友だちになれません

女１ じゃあ帰ったら？

女２ ええ帰ります

間。

女１ どうしたの？

女２ これ飲んだらね

女１ 帰りなさいよ

女２ もったいないでしょ

女１ さっさと飲めば？

女２ 猫舌なの

女１ 出てってよ

女２ あーあ、何だかなあ

女１ 何？

女２ もっと素敵な展開になるはずだったのに

女１ は？

女２ 謎の少女がね、ベランダに降り立ってそっと窓を叩くの

女１ バカじゃないの

女２ だからバカって言わないでよ

女１ だってバカじゃん

女２ なのに窓開けてくれないしさ

女１ 何で開けなきゃいけないの？

女２ どうしてカーテン閉めたのさ

女１ 閉めた方がいいと思ったの

女２ やめてよ

女１ 開けたでしょ

女２ 散々お願いしてやっと開けてくれたんじゃない

女１ あれは脅迫って言うの

女２ だってあそこで開けてくれなかったら私どうしたらいいのさ

女１ 帰ってご飯食べて寝たらいいんじゃない？

女２ 冷たいな

女１ それよりさ

女２ ん？

女１ ここ四階なんだけど

女２ うん。いい眺め

女１ あなた、ベランダにいたよね？

女２ うん

女１ どうやって登ったの？

女２ 登ったんじゃないよ

女１ じゃ、どうしたの？

女２ 飛んだ

女１ は？

女２ 飛んできた

女１ さ、とりあえず病院行く？

女２ いえ、お構いなく

女１ じゃ、警察呼ぼうか

女２ 無駄よ。電話線切ったから

女１ ……

女２ 冗談よ

女１ 冗談に聞こえないんだけど

女２ やだな、私がそんなことするように見える？

女１ 見える

女２ えー、そんな犯罪者じゃないんだからさ

女１ 不法侵入

女２ 許可は得たもん。入れてもらったんだもん

女１ 脅迫

女２ 違うよ。それに携帯あるから大丈夫だよ

女１ そういう問題？

女２ 妨害電波流してるけどね

女１ ……

女２ 冗談よ

女１ 冗談に聞こえないんだけど

女２ そんな風に見えないでしょ？

女１ 怪しい人だってことはわかる

女２ 何でよ

女１ おかしいでしょ。いきなり他人の家に上がりこんで理由も何も言わないで

女２ えっと、それは

女１ しかも飛んできたとか言ってさ。本当に警察呼ぶよ

女２ 何よ、さっきから聞いてれば勝手なことばっかり言って。最低ね

女１ 何で初対面の人に最低呼ばわりされなきゃいけないの

女２ ひどいこと言うからでしょ

女１ あんたが何にも言わないからでしょ

女２ それでもちょっとは気を遣いなさいよ。バカだバカだって言われたら落ち込むじゃない

女１ 何でその話になるの

女２ それが一番傷ついたの

女１ だってバカでしょ

女２ また言った

女１ 全然傷ついてるように見えない

女２ 傷ついたの。私の心は海の底深くに沈んでいったの

女１ そのまま溺れて死んでしまえ

女２ 何でそんなひどいことばっかり言うのよ

女１ あんたが私の話聞かないからでしょ。私は

女２ うるさい！

間。

女２ カフェオレおかわり

女１はコップを持って出ていく。女２は男１を見ている。しばらくして女１はコップを持って戻ってくる。

女１ はい

二人はカフェオレを飲む。

女２ よく眠ってる

女１ うん

女２ 旦那さん、起きないね

女１ 起きないよ

女２ え？

女１ ずっと、起きないの

女２ どうして？

女１ わからない。眠ったままなの

女２ いつから？

女１ ずっと

女２ ずっと？

女１ 彼は眠ったまま起きないの

女２ そうなんだ

間。

女２ 鼻から牛乳入れたら起きるんじゃない？

女１ そういうことやめて

女２ でもさ

女１ 色々試したんだから。でも起きないの

女２ 何でソファーで寝てるの？

女１ 私が寝かせてあげたの

女２ 何で？

女１ ずっとベッドにいたら飽きるでしょ

女２ 寝てるんだから飽きるとかないと思うけど

女１ 動かしてあげたいじゃない

女２ よくわかんない

女１ だから昼間はソファーに連れてくるの

女２ 優しいんだね

女１ そんなことないよ

女２ ねえ

女１ 何？

女２ 私たち、友だちになれないかな？

女１ ケンカしたのに？

女２ ケンカするほど仲が良いって言うじゃない

女１ そうね

女２ よかった

女１ 何が？

女２ 何でもない

女１ ふーん

女２ いいこと教えてあげる

女１ 何？

女２ 手をつないで眠ったら、同じ夢が見られるんだよ

女１ え？

女２ じゃあね

女１ あ、ちょっと

女２はベランダから飛ぶ。

女１はベランダから外を眺める。そして男１と手をつないで眠る。

【２】

夢の中。

男１と女１は手をつないで眠っている。男１は起き上がる。

男１ 僕が目を覚ますと、彼女は僕の手を握ったまま眠っていた。ずいぶん長いこと眠っていたような気がする。でも本当は僕はまだ眠っている。眠ったまま、夢の中で目を覚ましている。誰かと一緒に夢を見るのは初めてだ。彼女はどんな夢を見るんだろう。とにかく僕は、語り手として物語を語ろうと思う

女２、登場。

男１ 「昔、男ありけり」という言葉で始まる物語がある。ずっと昔の話だ。女が眠っている。男はその女のところへやってくる

女２ 起きて、ねえ

女１ え？

女２ 起きて

男１ 男は優しく声をかける。女は目を覚ます

女１ 誰？

女２ 目が覚めた？

女１ 誰よ、あなた

女２ 落ち着いて

女１ ちょっと、誰か、誰か

女２ 静かに。大きな声を出さないで

男１ 女は口を閉じた。そして男をじっと見ている

女１ 女の部屋に勝手に入ってくるなんて、ずいぶん非常識ね

女２ あなたがあんまりつれないから、ついね

女１ あなた、誰？

女２

男１ 在原業平、と男は答える

女１ あなたが

女２ 初めまして

女１ ふざけてばかりいると、身を滅ぼすわよ

女２ ふざけてなんかないよ。私は真面目なんだから

女１ 嘘ばっかり

男１ そう、男の言ってることはでたらめだ。彼はいろんな女に手を出して遊んでいる

女２ こうやってわざわざ会いにきたのに

女１ だったらそれなりの手順を踏んできたらどう？

女２ ちっとも相手にしてくれないじゃないか

女１ 当たり前でしょ。何であなたなんか

女２ 私が手紙を送ると大抵の女の子は喜んでくれるんだけど

女１ そんなのと私を一緒にしないで

男１ 貴族の女性というのは家の奥にこもっていてなかなか会うことができない。だから貴族の男はお付き合いしたい女性に手紙を送る。見えない相手に手紙を送って思いをつのらせていくのが、この時代の恋愛のあり方

女１ 噂は聞いてるんだから

女２ どんな噂？

女１ 在原業平は女好きの遊び好き。歌しか能のないだって

女２ ずいぶんひどい言われようだな

女１ 火のないところに煙は立たないって言うじゃない

女２ そんな風に見える？

女１ 見える

女２ そりゃ、歌だって好きだし女の子だって好きだけど

女１ ほら

女２ だからって、そんなに軽い気持ちじゃないんだけどな

女１ 私が誰だかわかってるの？

女２ もちろん

女１ 私とあなたじゃ釣り合わないわよ

女２ 気の強い人だ

女１ 事実よ

女２ 私が帝の血を引いていても？

女１ でも、あなた出世しないんでしょ？

女２ そうだね

女１ 遊ぶんだったらもっと頭の悪い女にしなさい。あなたとお付き合いしたがってる人はたくさんいるんでしょ？

女２ あなたのような聡明な女性にひかれてしまうんだよ

女１ 口だけだったら何とでも言えるわ

女２ じゃあ口だけじゃないところを見せてあげよう

女１ え？

男１ 男は女の手を取り、そのまま押し倒す

女１ 何をするつもり？

女２ そんなこと聞くのは野暮だよ

女１ 人を呼ぶわよ

女２ やめた方がいい。こんなところを見られて変な噂が立ったら、あなたも困るでしょう

女１ やめて

女２ 怖がらないで

女１ やめて

男１ 女は逃げようとするが押さえ込まれて動けない。ゆっくりと近付く唇。絶体絶命の女。おっと、女は渾身の力を振り絞って男を突き飛ばした。男は残念そうな顔をしている。女はちょっぴり涙目だ。大丈夫だろうか

女１ ちょっと、あんた

男１ え？

女１ あんた、何？

男１ え？　俺？

女１ そう。あんた

男１ 語り手

女２ 語り手？

男１ 物語を語る役の人

女１ 何でもいいけどさ。うるさい

男１ いや、うるさいって言われても

女２ 何なの？

女１ 何か変な人がいる

男１ 変な人じゃないよ

女２ どういうつもりなんだろう

女１ 知らない

男１ 俺の話聞いてよ

女１ こっちは必死にやってるの。あんたが余計なこと言うと気が散るの

男１ でも、こっちは喋るのが仕事だから

女２ それ、必要なの？

男１ 必要だよ

女１ いらないんじゃない？

女２ そうだよ

男１ ダメだって

女２ どうして？

男１ 語る人がいなきゃ物語は進まないよ

女１ そんなのいなくても問題ないと思うけど

女２ そうそう。登場人物がいれば十分だって

男１ それはそうかもしれないけど

女１ ほら

男１ でも俺も登場人物みたいなものだから

女２ みたいってことはそうじゃないってことでしょ

男１ そうなんだけど

女１ ほら、いらないじゃない

女２ うん、いらない

女１ 帰って

男１ 待ってよ。困るよ

女２ 何が困るの？

男１ いさせてよ

女２ いたいの？

男１ いたい

女２ いたいんだって

女１ いてほしくない

男１ 物語は語る人がいないと。それに俺がいると便利だよ

女２ 便利？

男１ 雨が降ったり

雨の音がする。

男１ 雷が鳴ったり

雷の音がする。

男１ あとよくわからない音が鳴ったり

よくわからない音がする。

男１ 物語に必要な効果とか

女２ 要するに裏方の人ってことね

男１ そうじゃないんだけど、まあいいか

女１ どうしてもって言うならいてもいいけど、邪魔しないでよね

男１ わかってる

女２ だったら登場人物になっちゃえばいいんじゃない？

男１ え？

女２ 一緒にやろうよ

男１ でも、そういう役割じゃないから

女２ 固いこと言わないの。いいでしょ？

女１ まあ、いいけど

男１ 勝手に決められても

女２ はい、決まった

男１ 早いな

女２ 私が在原業平

女１ 私はの

男１ 語り手

女１ 何か変じゃない？

女２ 変じゃない

男１ だったら俺が在原業平をやろうか

女１ それは嫌

男１ 何でだよ

女２ さ、始めるよ

女１ どこから？

女２ 語り手さん。どこから？

男１ 男が女を連れ去るところから

女２ 行くぞ

女１ ちょっと、離して

男１ 大人しくしろ

女１ 何であんたがやるの？

男１ 俺も参加するんだろ？

女２ そうそう

女１ 二対一って卑怯

男１ 物語の趣とか、そういうのがなくなってる気がするんだけど

女２ これじゃただの人さらいだね

女１ 変なとこ触らないで

女２ どこに行くの？

男１ という小さな川へ

女２ わかった

女１ やめてよ、やめて、離して

女２ 行くよ

女２と男１は女１を連れ去る。

男２・男３・男４、登場。

男２ 昔、男がいた

男３ 名を在原業平という

男４ としての才能に溢れ、多くの歌を詠んだ

男２ そして、多くの女と恋をした

男３ 時は平安時代

男４ 今から千年以上も前の話

男２ のと噂されたその男は、帝の血を引いていたが、家臣となり、官位にも恵まれなかった

男３ な和歌の世界に生き、古今和歌集にも多くの歌が収録された

男４ 在原業平は伊勢物語の主人公とされる

男２ 伊勢物語の成立は平安時代前期

男３ 作者はわからない

男４ 百二十五の断片的な章段で構成されている

男２ その中に、二条の后という女が登場する

男３ 二条の后はの娘。後にの后となる

男４ 男は女に道ならぬ恋をした

男２ 夢の中で物語が始まる

男２・男３・男４、退場。

女１・女２、登場。

女２ ちょっと待って

女１ 何？

女２ 早いよ

女１ そっちが遅いんでしょ

女２ 何で勝手に行っちゃうの？

女１ ぐずぐずしてるのは嫌いなの

女２ のんびり行こうよ

女１ のんびりしてられないでしょ。夜も遅いのに

男１、登場。

男１ 置いていかないでよ

女１ 遅い

男１ そんなこと言われても

女２ だらしないな

男１ 語り手置いていったらダメでしょ

女２ だって先に行っちゃうんだもん

女１ 二人が遅いからでしょ

男１ 何か、立場おかしくない？

女１ 何が？

男１ 連れ去られてるんだよね

女１ うん、そうだよ

男１ 何で先頭切って走っていくの？

女２ やる気満々だね

女１ 文句言うんだったらちゃんと連れていってよ

女２ あんた、ちゃんとしなさいよ

男１ え？　俺？

女１ で、どこまで行くの？

女２ どこまで行こう

女１ ここ、どこ？

男１ 芥川

女１ 芥川？

男１ そこは芥川という名の川なのか、それとも名もなきの川なのか、とにかく男は女を連れてそこまで辿り着いた

女２ そういう風にしてると語り手っぽいね

男１ ぽいんじゃなくてそうなんだよ

女１ これからどうするの？

女２ どうしよう

女１ 考えてないの？

女２ だって、とりあえず連れだそうと思っただけだから

女１ 何それ？

女２ どうなるの？

男１ それを言ったらおもしろくないでしょ

女２ そうだよね

女１ 教えてよ

男１ おもしろくないよ

女２ おもしろくないの？

男１ いや、おもしろいよ

女１ 意味がわかんない

女２ おもしろい方がいいでしょ。でなきゃこんなことしてる意味がない

女１ おもしろい？　こんなことしてて

女２ おもしろいよ

男１ おもしろい

女１ 捕まったら打ち首よ

男１ 島流しかもね

女２ そうなったらそうなったまで

女１ 破滅願望でもあるの？

女２ あなたを愛するがゆえに

男１ 格好良い

女１ よく言うわ

女２ 何でそうやって全然相手にしてくれないの？

女１ 脈がないってわかるでしょ

女２ そんなこと考えたら恋愛なんかできないよ

女１ 普通はあきらめるものだと思うけど

女２ 障害がある方が燃えるんじゃないかな

女１ バカじゃないの

女２ この情熱を理解してほしい

男１ 二人はどうして知り合ったの？

女１ 別に知り合ってないよ

男１ でも知ってるんでしょ

女１ 在原業平っていうバカな男がいるって噂で聞いただけ

女２ 私はいい女がいるって聞いて手紙を送った

女１ そういうの迷惑なんだけど

男１ そんなことないよ

女１ 何であんたが言うの？

女２ ひじき藻を贈ったの、覚えてる？

女１ ああ、あの変な海草ね

女２ 変なってことはないだろ

女１ 何であんなものくれたの？

女２ 思あらば　の宿にもしな　ひしきものにはをしつつも

女１ どういう意味？

男１ 愛情があるなら、荒れ果てた家でだって一緒に眠ることができるでしょう。布団がなくても、着物を敷けば眠れる

女２ 愛があればどんなところにいても大丈夫っていう意味

女１ 全然わからない

男１ 「ひじき藻」と「ひしきもの」がになってるんだよ

女１ そんなことは聞いてない

女２ 気に入らなかった？

女１ 全然

女２ どうして？

女１ 迷惑なの

女２ 迷惑？

女１ 私がどういう立場にあるかわかってる？　私は帝の后になるの

女２ 知ってるよ

女１ だったら

女２ 障害があった方が燃えるって言わなかった？

女１ バカじゃないの？

男１ そうだよ

女２ 君の兄貴たちにもずいぶん嫌われてさ。会わせてもらえないんだよ

女１ 当然でしょ

女２ だったら無理矢理にでも連れ出すしかない

女１ そんなことをしてどうなるの？　うまくいくわけないじゃない

女２ そんなことわからないよ

女１ あなたは都を追われるわ

女２ だったら東の国にでも行くさ

女１ そうやって落ちぶれたらいいわ

女２ 一緒に行こうよ

女１ 私を巻き込まないでよ

女２ あなたのせいだよ

女１ 何が？

女２ あなたのせいで、私は都を追われるんだから

女１ 自業自得でしょ

女２ あなたはそれでいいの？

女１ え？

女２ 帝の后になって満足？

女１ 満足よ

女２ 本当に？

女１ 女が権力を望んではいけない？

女２ そんなことはないけど

女１ けど、何？

女２ 窮屈な生活に耐えられるの？

女１ それはあなたのことじゃないの？

女２ どういうこと？

女１ 帝の血を引いているのに、権力争いから逃げ出したんでしょ

女２ それは私が望んだことではない

女１ 口では何とでも言えるわ。窮屈な生活に耐えられないのはあなたの方でしょ

女２ あなたに私の何がわかる

女１ わからないわ。だからあなたの身勝手を私に押しつけないで

女２ あなたは帝を愛せるの？

女１ 愛せるわ

女２ 私が帝になったら、あなたは后になってくれる？

女１ 考えてもいいわ

女２ それなら悪くないかもね

女１ 勝手な人

女２ あなたが思ってるほど、私は恵まれてないよ。私にできるのは、歌を詠むことと、女の人を愛すること

女１ それで恋に破れて都を追われるの？

女２ そう

女１ かわいそうな人

女２ そうでもないよ

男１ 草むらの中で何かが光る。「あれは何？」と女が尋ねる

女１ あれは何？

女２ どれ？

女１ ほら、あれ。きらきら光ってる

女２ 本当だ

女１ あれ何？

女２ さあ？

女１ 宝石みたい

女２ 違うと思うけど

女１ どうして？

女２ あんなところに宝石は落ちてないよ

女１ 取ってきて

女２ え？

女１ 取ってきてよ

女２ そんなこと言われても

女１ あれを贈り物にくれたら、あなたとの恋を考えてもいいよ

女２ 意地悪な人だ

雷が鳴る。

男１ 雷が鳴って、雨が降りだした

女２ まずいな

女１ どうするの？

女２ そこの小屋で休もう

女１ あんな汚い小屋？

女２ 一緒に寝ようか

女１ 嫌よ

女２ さっきの歌の通りだ

男１ 男は女をあばら屋に押し込む

女１ 物の怪が出るんじゃない？

女２ 大丈夫だよ。私が守る

女１ 本当に？

女２ ここにいて。私は入り口を見張るから

女１ 一緒にいてくれないの？

女２ え？

女１ 何？

女２ もっと気の強い人だと思ってた

女１ 雷は苦手なの

女２ そうなんだ

女１ 何よ

女２ 必ず守ってあげるから、心配しないで

女１ ねえ

女２ 何？

女１ どうして私を連れてきたの？

女２ あなたを愛しているから

男１ 男はあばら屋の入り口に立って弓を構える。鬼たちが現れる

男２・男３・男４、登場。

男２ 人がいるぞ

男３ 女の臭いだ

男４ 女がいるぞ

女２ ここは通さない

男２ そこをどけ

男３ どかなきゃ食うぞ

男４ 女を食わせろ

女２ そんなことはさせない

男１ 鬼は男に襲いかかる。男は矢を放つ。鬼は姿を消す

男２・男３・男４、退場。

男１ しかし、あばら屋の中には一匹の鬼がいる

男５ 女か

女１ 誰？

男５ 見てわからぬか

女１ 物の怪？

男５ 人から見ればそうだろう

女１ 鬼ね

男５ 女、何をしている

女１ 何をって

男５ 外に男がいたな

女１ ええ

男５ 俺がここにいることも知らないで。間抜けな男だ

女１ 彼は私を守ってくれる

男５ じゃあ助けを呼んでみろ

女１は叫ぶ。雷が鳴る。

男１ 女は叫ぶが、雷の音で男には聞こえない

男５ 間抜けな男だ。それにのこのこついてきたお前も間抜けだ

女１ 何ですって？

男５ 家で大人しくしていれば、こんな目に遭わずにすんだのに

女１ あなたには関係ないでしょ

男５ 男に惚れたか。惚れた男のために身を滅ぼす。哀れな女だ

女１ そんなことない

男５ そして男はお前に惚れたがために身を滅ぼす

女１ 勝手なこと言わないで

男５ 何が勝手だ。事実だろう。お前は一体何を望んでいる？

女１ え？

男５ 帝の后になって幸福を得ることか、男と共に身を滅ぼすことか。決められないだろう。どちらもお前の望んだことではない

女１ そんなことない

男５ 何だと？

女１ そんなことない。自分の道は自分で選ぶ

男５ お前が何を選んだというのだ

女１ 私は望んでここに来たの

男５ 後悔しているのではないのか

女１ そんなことない

男５ どうして

女１ 彼が愛していると言ってくれたから

男５ ならば俺に食われて死ね

男５は女１を連れ去る。

男１ 女は叫んだかもしれない。しかし雷がすべてをかき消した。男に女の声は届かない。夜が明けて、雨が上がり、男は女がいないことに気付く。すべてを悟って呆然とする男は歌を詠む

女２ か　なにぞと人の問し時　とこたて消えなましものを

男１ あの光っているものは何ですかと、あなたは聞いた。自分は何も答えなかった。あれは宝石なんかではなくただの露だと、そう答えて自分も露のように消えてしまえばよかった。男はそんな歌を詠んだ

【３】

女１と女２がいる。男１が眠っている。

女２ ふーん、そんな夢だったんだ

女１ うん

女２ 変なの

女１ 変でしょ

女２ 何で伊勢物語なの？

女１ この人、高校で国語教えてるの

女２ 学校の先生？

女１ そう。大学では古文を専攻してたから。伊勢物語、好きなんだよ

女２ それでか

女１ よく話してくれた。よくわからなかったけど

女２ 伊勢物語って歌物語だよね

女１ うん。和歌がたくさん出てくる

女２ 和歌ってよくわかんないんだよね

女１ そうそう。百人一首とか覚えたけどさ、意味がさっぱり

女２ 百人一首に在原業平の歌があったでしょ

女１ 何だっけ？

女２ ちはやぶるも聞かず竜田川

女１ からくれなに水くくるとは

女２ そうそう

女１ あったあった

女２ どういう意味？

女１ さあ？

女２ 在原業平ってプレイボーイだったんでしょ

女１ そうらしいね。光源氏みたい

女２ それは源氏物語の方？　それともジャニーズの方？

女１ どっちでもいいよ

女２ 絶世の美男子か。見てみたいな

女１ 歌の良さはよくわからないけど

女２ その時代って歌が詠めないとダメなんでしょ

女１ そう。和歌を送りあって交際するの

女２ 文通だよね

女１ そう、文通

女２ いつの時代？

女１ 平安時代

女２ 結婚するまで顔もわからないんでしょ。怖いよね

女１ お見合いよりすごいよ

女２ どうする？　結婚相手の顔がわからなかったら

女１ 絶対嫌

女２ すごい格好良いって噂だったら？

女１ ちょっと考える

女２ 全然時代が違うね

女１ すごいよね

女２ 在原業平は女を口説く才能があったってことか

女１ まあ、そういうことかな

女２ 彼はどうだったの？

女１ え？

女２ 旦那さんは、女を口説くのは上手だった？

女１ 全然

女２ 全然？

女１ うん、全然。鈍感だし、趣味とか仕事が生き甲斐みたいな人だから。恋愛の微妙な駆け引きとかできないんじゃないかな

女２ それ、ダメだよね

女１ ダメだよね。うん、ダメだと思うよ

女２ それで伊勢物語が好きなの？

女１ そう。おかしいでしょ

女２ ロマンチックなのかな

女１ ロマンチックだと思うよ

女２ 男なんてそんなもんか

女１ 女の気持ちなんてわからないでしょ

女２ 男の気持ちもわからないけどね

女１ 言えてる

女２ 同じ夢を見ても、同じ気持ちにはなれないか

女１ ねえ

女２ 何？

女１ あの夢は誰の夢？

女２ どういうこと？

女１ あれは彼の夢なの？　それとも私の夢？

女２ 両方じゃないの？

女１ 両方？

女２ だって同じ夢を見たんでしょ

女１ 彼の夢をのぞいてるんだと思ってた

女２ だったら、あなたの夢はどこに行っちゃったの？

女１ さあ？

女２ だから、二人の夢でいいんじゃない？

女１ おもしろい話聞いたことがあるよ

女２ 何？

女１ 普通、夢に誰か出てくるとさ、自分がその人のこと好きなんだって思うじゃない

女２ ま、好きな人だったらそうだね

女１ 昔は逆だったんだって

女２ どういうこと？

女１ 誰かが夢に出てくるのは、その人が自分のことを好きだから出てくるんだって考えるの

女２ おもしろいね

女１ でしょ

女２ でも、それってすごく自分勝手な考え方じゃない？

女１ だよね

女２ 夢に出てくる人は自分に気があるんだ

女１ 夢占いみたいなものかな

女２ そういうもんか

女１ 夢を見てさ、昔のこと思い出したんだ

女２ 昔のこと？

女１ 子どもの頃のこと。友だちと遊んだこと

女２ どうして？

女１ 私、あんまり友だちいなかったんだ。でも、優しくしてくれる子がいてさ

女２ へえ

女１ 探検に行ったんだ

女２ 探検？

女１ 近くの山に入っていって、探検したの

回想。

男２・男３・男４、登場。

男２ 本当だって

男３ 嘘だ

男２ 本当だよ

男３ いるわけないじゃん

男４ 何の話？

男２ 見たんだよ

男３ 見間違いだろ

男２ 本当だよ

男４ ねえ、何の話？

男３ どこで見たんだ

男２ ふたご山の山小屋

男４ ねえ、教えてよ

男２ いいか、俺は化物を見た

男４ すげえ

男３ 嘘だ

男２ 嘘じゃない

男３ じゃあどんなのだよ

男２ どんなのって、えっと、それは、でっかくって、角が生えてて

男４ サイ？

男２ サイじゃないよ

男４ じゃあゾウ？

男２ それは化け物じゃないだろ

男４ あ、そっか

男２ とにかくすごいんだから。雪男みたいなビッグフットで顔はツチノコ、手はチュパカブラ。天狗と河童の友だちで、空を飛べるの

男３ そんなのいるわけないだろ

男４ 強そう

男２ とにかく見たんだ。信じろよ

男３ 信じられるか。子どもじゃないんだから

男２ 子どもだろ

女２ 本当に見たの？

男２ え？

男３ 何か用か？

女２ 本当に化物がいたの？

男２ ああ、いたよ

女２ じゃあ確かめに行きましょう

男２ え？

女２ いるかどうか確かめてみたらいいんじゃない？

男４ 行きたい

男２ いや、別にそこまでしなくたって

男３ やめとこうぜ

女２ 怖いの？

男２ 怖くなんかないよ。なあ？

男３ え？　ああ

男４ 行こう

男３ お前、ちょっと黙ってろ

女２ どうする？

男２ よし、行こう

男３ え？

男４ やった

女２ じゃあ行きましょう

男２ ただし、俺がリーダーだ。いいな

女２ いいよ

男２ よし、決まった

男３ そいつはどうするんだよ

男３は女１を指す。

女２ 連れていくよ

男２ ダメだ

男４ そうだ

女２ どうして？

男３ 女はダメだよ

男４ そうだぞ

女２ 私だって女だよ

男４ お前、男より強いじゃん

女２ 何ですって？

男３ 足手まといは連れていけない

男４ そうだぞ

女２ いいじゃない。たくさんいた方が楽しいよ

男４ そうだな

男３ お前はどっちの味方なんだ

女２ あんたら、男のくせに肝っ玉が小さいね。金玉ついてるの？

男２ ついてるよ

女２ だったら仲間はずれにしないでよ

男２ わかったよ

男３ いいのか？

男２ 仕方ないだろ

女２ ほら、行くよ

男２ リーダーは俺だぞ

移動。

女２ どれ？

男２ あの小屋

男３ あれ？

男４ 不気味

男２ あそこに、鬼みたいなのがいたんだよ

男３ お前、中に入ったの？

男２ え？

女２ 入ったの？

男２ 入ったよ

男４ 本当に？

男２ 本当だよ

男３ なあ、どうするんだ？

男２ どうするって？

女２ 入ってみようよ

男４ ええ？

男３ やめようぜ

女２ どうして？

男４ 怖そう

男２ 何だよ、お前ら。だらしないな

男３ だってさ

男２ 大丈夫だって。俺がついてる

女２ そう。リーダーがいるから大丈夫

男２ そうだ

女２ よし、行け。リーダー

男２ 俺？

男３ 頼んだぞ。リーダー

男４ よろしく。リーダー

男２ おう

男２は小屋に近付く。

男２ やっぱりみんなで行こう

男３ 何だよそれ

男２ いいから

男２・男３・男４は小屋に近付く。鳥の鳴き声がする。男２・男３・男４は逃げる。

女２ あ、ねえ、ちょっと。もう、だらしないな、男は

女１ ねえ

女２ ん？

女１ 帰ろう

女２ どうして？　せっかく来たのに

女１ 怖いよ

女２ 大丈夫だって

女１ 入るの？

女２ 入るよ

女１ やめようよ

女２ 大丈夫。私がついてるから

女１ うん

女２ 行くよ

女１ うん

二人は小屋に近付く。

女２ ドア、開いてる

女１はドアを開ける。二人は小屋の中に入る。

女２ お邪魔します

間。

女２ 何にもいないね

女１ うん、いない

女２ いないね

女１ いない

二人、笑いだす。

女２ だから大丈夫だって言ったでしょ

女１ 何にもいなかった

女２ 緊張して損した

女１ 怖かった

女２ 怖かったね

女１ 怖かったの？

女２ 怖かったよ

女１ そうなんだ

女２ 何？

女１ 怖いものなんかないんだと思ってた

女２ そんなことないよ

女１ そうなの？

女２ ここ、何かな？

女１ 山小屋？

女２ あいつ、何を見たんだろう

女１ 誰かいたのかな

女２ 怖いおじさんとかいたんじゃない？

女１ 怖い

女２ 怖いね

女１ うん、怖い

女２ 怒られるかな？

女１ 怒られると思うよ

女２ だよね

女１ 怒られる

女２ 怖い

女１ 怖いね

女２ 怒られる前に帰ろうか

女１ うん

女２ あー、おもしろかった

女１ ありがとう

女２ 何が？

女１ 連れてきてくれて

女２ 当たり前じゃない。友だちなんだから

女１ 当たり前なの？

女２ 当たり前だよ

女１ そっか

女２ そうだよ

回想、終わり。

女２ じゃあ、何にもなかったの？

女１ うん。何にもなかった

女２ そうなんだ

女１ 化物なんかいなかった

女２ うん

女１ 伊勢物語でもね、本当は鬼なんかいなかったんだ

女２ そうなの？

女１ 女を取り返しにきた人たちがいたの

女２ ふーん

女１ 鬼なんかいなかったんだ

女２ それ、何かつまんないね

女１ うん、つまんないよ。現実はつまんないの

女２ 現実？

女１ そう、現実

女２ 何かあったの？

女１ その日は帰るのが遅くなって、私はお母さんにものすごく怒られて、その子とはもう遊べなくなったの。それで、もう遊べないまま、私は引っ越しちゃったの

女２ そうなんだ

女１ 現実はね、つまんないのかもしれない

女２ でも、いい思い出なんでしょ？

女１ え？

女２ 今でも覚えてるってことは、いい思い出なんじゃないの？

女１ うん、そう。いい思い出。でも、ずっと忘れてた

女２ いつの間にか忘れてることって多いから

女１ 一生覚えておこうって思っても、気がついたら忘れてる

女２ でも、また思い出すでしょ

女１ 思い出すかな

女２ 思い出すよ、きっと。で、またいい思い出をつくるの

女１ そうだね

女２ 今日はどんな夢を見るの？

女１ わかんない

女２ いい夢だといいね

女１ うん。わかんないことって楽しいよね

女２ うん、そうだね

【４】

夢の中。

男１・女１・女２がいる。

男１ 昔、男がいた。男には幼なじみの女がいた。子どもの頃はよく井戸の周りで仲良く遊んでいたが、大人になると恥ずかしくなって顔を合わせなくなってしまった。しかし、お互いに結婚したいと思っていたのである

女２ つの　にかけしまろがたけ　過ぎにけらしな見ざるまに

私の背丈はあなたに会わないうちにずいぶん高くなりました。井戸の周りで遊んでいたあの頃とはもう違います

女１ くらべこし　ふりわけ髪も肩過ぎぬ　君ならずしてかあぐべき

あなたと長さをくらべてきた髪も肩より長くなりました。あなたにこの髪を結い上げてもらいたいのです

男１ このように歌を交わして二人は結婚した

女２ 愛してるよ、ハニー

女１ 私もよ、ダーリン

男１ 二人は今の奈良県、で幸せに暮らした。しかし生活は貧しくなる一方だった

女２ 貧乏だね、ハニー

女１ 悲しいわ、ダーリン

男１ そこで男は今の大阪府、に愛人を作った。当時、妻の実家が持つ権力や経済力は重要なものだった。こうして、男が高安へと通っていく生活が始まった

女１、退場。男２・男３・男４、登場。

男２ 高安に愛人を作ったそうだな

男３ 噂になってるぞ。幼なじみ一筋じゃなかったのか

女２ 耳が早いな

男４ 耳が早い？

男２ 一体何があったんだ

男４ 耳っていうのは早かったり遅かったりするのか？

男３ そういうことじゃない

男２ 男ってのはそんなもんかね

男３ 結婚したら変わるんだよ

男２ 女だって結婚したら変わるって言うぞ

男３ お前、それ誰に聞いたんだよ

男２ 小耳に挟んだんだよ

男４ お前の耳は物が挟めるのか

男３ お前は黙ってろ

女２ 別に、愛人なんて欲しかったわけじゃない

男２ うらやましいね。俺だって愛人作ってみたいよ

男３ お前はまず結婚しろ

男２ お前に言われたくないよ

女２ だから、そういうのじゃないんだって

男２ 罰が当たるぞ

男４ 当たれ当たれ

女２ お前らには、所帯を持つ苦労はわからんだろ

男４ わからん

男２ 何だよ、偉そうに

男３ ひがむな。見苦しいぞ

男２ だってさ

男３ 俺たちの出世頭を応援してやろうって、集まってるんだろ

男４ そうだった

男２ そうだよ。冷やかしてばっかりじゃダメだ

男３ お前が冷やかしてたんだろ

男２ 俺はさっきまでの俺じゃない

男４ じゃあ誰なんだ

男３ で、どうなんだ？　実際

女２ 結婚生活ってのは、金がかかるぞ

男２ 金か

男３ 金はないぞ

男４ 俺もないぞ

女２ 別に貸してくれって言ってるわけじゃない。そのための愛人だ

男３ どういうことだ

女２ 妻が親をなくしてさ、生活が苦しくなったんだよ

男３ 嫁の実家が頼みの綱だからな

女２ で、どうしようもなくなって

男２ 別の女に手を出したと

女２ そういう言い方するなよ

男３ 事情はわかった

男４ 大変だな

女２ ま、それはいいんだよ。高安の方ともうまくやってる。問題はうちの女だ

男３ 幼なじみか

男２ どうした？　行かないでって泣くのか？

男４ それはかわいそうだ

女２ 普通なんだよ

男２ はあ？

女２ 俺が高安に行くときも、嫌な顔しないで見送るんだ

男４ それ、おかしいのか？

男２ おかしいだろ。旦那が別の女に会いにいくのに

男３ でもそれは納得してるんだろ

男２ 頭ではわかっても、心はそうはいかないだろ

女２ 取り越し苦労ならいいけど

男２ 男だな

一同 え？

男２ 浮気相手がいるんだよ。だから平気な顔して見送るんだ

女２ いや、そんなことはないだろ

男２ いや、わかんないぞ。女は変わるからな

男３ 何を偉そうに

男４ 複雑だな。旦那にも愛人がいて、嫁にも愛人がいて

男２ よし、見張ってみよう

男３ 見張る？

男２ 高安に行くふりをして、女を見張るんだ。浮気の現場を押さえられるぞ

男４ おもしろそうだな

女２ 別にそんなことしなくても

男２ 本当にいいのか？

女２ 何が？

男２ お前の妻はお前を愛していないかもしれないんだぞ

男３ それ、やってみるのも悪くないな

女２ おい

男３ いいじゃないか。何もなければ誤解だってわかるだろ

男２ どうする

女２ わかった

男３ よし、決まった

男４ やるのか

男２ いつやる？

女２ じゃあ、今夜

男２・男３・男４、退場。

男１ 本当にやるの？

女２ やるよ

男１ どうして？

女２ 別にいいだろ

男１ 疑ってるの？

女２ 疑ってなんかない

男１ だったらこんなことしなくたって

女２ さっき言ってたろ。何もなければそれでいいんだから

男１ 本当にそう思ってる？

女２ 他にどう思ったらいい？

男１ 浮気してたらいいなって思ってない？

女２ ……

男１ 図星？

女２ 彼女が何を考えてるのかわからない

男１ そりゃわかんないでしょ

女２ 夫婦ってわかりあえるものじゃないのかな

男１ 理想はそうだろうけど。わかりあおうとしてるかどうかが問題かな

女２ 痛いとこつくね

男１ だって後ろめたさでいっぱいなんでしょ

女２ 何でこんなことになっちゃったのかな

男１ なるようにしかならないね

女２ 言っておくけど、彼女の浮気を望んでるわけではないから

男１ そんなことわかってるよ

女２ でも、そういうことを考える自分が嫌になる

男１ ま、夫婦の問題だから。自分たちで何とかしてよ

女２ ああ、そうする

女２、退場。

男２・男３・男４・女１、登場。

男２ ねえねえ、旦那さん浮気してるって本当？

男３ 高安に愛人作ったんだって？

男４ 嘘でしょ。あんなに仲良かったのに

女１ 浮気っていうわけじゃないんだけど

男２ じゃあ本当なの？

男４ 最低ね、男って

男３ でも貴族の男だったら愛人くらいいるもんじゃないの？

男２ ダメよ。そんなの

男３ そう？

男２ 女は生涯ただ一人の男を愛するものなの。男だってそうあるべきじゃない？

男３ あんたが言っても全然説得力ないよ

男２ 何でよ

男４ あの男がいいとか、その男がいいとか、いつも言ってるじゃない

男２ それはそれ。これはこれ

男３ どれがこれなの？

男２ だからそれよ

男４ それってどれよ

男２ それがこれなの

男３ それじゃわかんないよ

男２ わかるでしょ

男４ 全然わかんない

男３ 大体あんた、生涯愛してくれる人もいないくせに、そんなこと言ったって仕方ないでしょ

男２ あんただって一緒でしょ

男４ 私だって一緒だよ

男２ で、何でそんなことになっちゃったわけ？

女１ 私の父が亡くなったでしょ

男３ そうよ、大変だったわね

男４ ご愁傷様

男２ お父様が亡くなられて、落ち込んでやしないかって、私、心配で

女１ それはもう大丈夫

男２ 本当に？

女１ うん。ありがとう

男３ じゃ、何なの？

女１ お金がないの

男２ お金？

男３ お金か

男４ お金ね

女１ 結構、私の実家をあてにしてたからさ。生活が苦しくなっちゃって

男２ 嫁の実家って大事だもんね

男３ 経済力と権力がないと結婚なんかできないから

男４ そういうのって政略結婚って言うんじゃないの？

男３ 何言ってんの？　政略結婚しない貴族なんかいるわけないでしょ

男２ いるじゃない。ここに

女１ 私たちは、そんな

男２ 幼なじみなんでしょ

男４ うらやましいな。そんな純愛

男３ それはたまたま身分が釣り合ったからでしょ

男２ ずいぶん反対されたって聞いたけど

女１ まあね

男４ 親の反対を押し切って

男２ 禁断の愛

女１ そこまでじゃないけど

男２ なのに愛人なんか作って

男４ 許せない。その旦那

男３ 相手はお金持ちなの？

女１ それなりに。生活も楽になるし、仕方ないよね

男２ 泣かせるわね。夫に尽くす健気な妻

男４ 女の鏡ね

男３ 貴族の妻だったらそれぐらい覚悟しなきゃいけないでしょ

男２ バカね。割り切れないから女心でしょ

男４ 男なんかケダモノよ。心変わりするかもよ

男２ そうよ。心変わりしたらどうするの？

女１ 大丈夫だよ

男２ 大丈夫なわけないでしょ。世間知らずなんだから

男４ 男なんか信じたって裏切られるだけよ

男３ あんたら、何か嫌なことでもあったの？

女１ 私たちは大丈夫

男２ 本当に？

女１ うん

男３ じゃあ試してみる？

男４ 試すって、どうやって？

男３ わざと素っ気ない態度をするの。旦那が愛人のところへ行っても知らん顔

男２ それで何がわかるの？

男３ こっちのことを好きだったら、怒ったり心配になったりするでしょ

男４ ああ、そっか

男２ こっちに興味がなくなってたら、特に反応はなし

男３ どう？

女１ 私、普段から素っ気ない気もするけど

男３ いいから。試してみようよ

女１ いいよ。いつもと同じでいいんだよね

男２ そうね

男３ じゃ

男４ またね

男２・男３・男４、退場。

女２、登場。

女２ それじゃ、行ってくるよ

女１ 行ってらっしゃい。あなた

女２ ご飯は向こうで食べるから

女１ うん

女２ 先に休んでいいからね

女１ わかってる。私も縫い物とか、やることいろいろあるから

女２ うん。頼むよ

女１ 気をつけてね

女２ ああ。じゃ

間。

女２ （同時に）ねえ

女１ （同時に）ねえ

女２ え？

女１ 何？

女２ 先に言いなよ

女１ 私って素っ気ないかな？

女２ 何？　いきなり

女１ そうじゃない？

女２ 素っ気なくはない、こともない

女１ 何それ？

女２ 率直に聞かれると困るな

女１ 別に困ることじゃないでしょ

女２ 私はダメな夫だ

女１ そんなことないんじゃない？

女２ あなたは嫌な顔ひとつしないね

女１ 何が？

女２ 自分の夫が別の女に会いにいくのに

女１ 私が嫌な顔をしたら、あなた行くのをやめてくれるの？

女２ ……

女１ で、あなたは？

女２ え？

女１ 何か言いたかったんじゃないの？

女２ いや、いいよ

女１ 家のことは大丈夫よ。気を付けていってらっしゃい

女２ ああ

女２は出ていく。女２は隠れて女１を見ている。

女１ 私って素っ気ないかな？

男１ そうだと思うよ

女１ そうだよね

男１ 文句とか言わないの？

女１ 言ってどうするの？

男１ だって、旦那が浮気してるんだよ

女１ それは仕方ないでしょ

男１ 不満じゃないの？

女１ 不満よ

男１ だったら

女１ 文句を言ったら、すこしは状況が良くなるの？

男１ さあ？

女１ いっそのこと別れた方がいいと思ってるの？

男１ そこまでは言ってないけど

女１ 私はそんな感情的な女になりたくないの

男１ 女は感情的な生き物じゃないの？

女１ 逆でしょ。男の方がその場の雰囲気に流されて。女々しくて。女はもっと打算的なんだから

男１ それを自分で言うのもどうかと思うけど

女１ 私はよき妻でありたいの

男１ 旦那の浮気にも文句言わずに待ってるのがよき妻？

女１ いいえ。文句も言わずに待ってるふりをするのがよき妻

男１ 何それ？

女１ あの人は必ず帰ってきてくれる。そこに優越感を感じるのが私のやり方

男１ それって嫉妬してるってこと？

女１ 当たり前でしょ

男１ それでいいの？

女１ いいよ

男１ 本当に？

女１ でないと私、耐えられない

男１ そうだね

女１ 風吹けば　つ　にや君がひとり越ゆら

龍田山を、夜中にあなたが一人で越えていくのでしょうか。私はその情景を思い浮かべて、こうして一人で待っています

男１ その歌はどういう意味？

女１ あの人はちゃんと帰ってきてくれるから。だから私はそれを信じて待つの。それだけ

女２は女１の前に出る。

女１ どうしたの？　高安へ行ったんじゃないの？

女２ やめた

女１ え？

女２ 行くのはやめたんだ

女１ どうして？

女２ 今日はあなたと過ごしたい

女１ でも

女２ そういう気持ちになったんだ

女１ いいの？

女２ うん、いい

女１ 私、言ってなかったことがあるんだけど

女２ 何？

女１ 本当は寂しかったの

女２ ごめん

女１ ううん、いいの

女２ あなたは聞きわけがよすぎる

女１ それっていけないこと？

女２ 私の罪悪感ばかり膨らんでいくよ

女１ あなたを試していたの

女２ 私を？

女１ 私に愛想を尽かしてしまうんじゃないかって

女２ そんなこと考えてたの？

女１ 友だちが言ったのよ

女２ ひどい友だちだ

女１ そうよね

女２ で、どうだった？

女１ 違った

女２ よかった。実は私も試していたんだよ

女１ あなたも？　何を？

女２ あなたが浮気をするんじゃないかって

女１ 私が？　どうして？

女２ 友だちが言ったんだよ

女１ ひどい友だち

女２ そうだね

女１ で、どうだった？

女２ 違った

女１ よかった

女２ いつまでも、ずっとあなたと過ごしたい

女１ いつまでも？

女２ いつまでも

女１ ずっと？

女２ ずっと

女１ 嬉しいわ

女２ たまにはわがままも言ってよ

女１ そうね。考えておくわ

女３、登場。女２、退場。

女３ 君があたり　見つつをら　雲な隠しそ雨は降るとも

男１ 高安の女は歌を詠んだ

女３ あなたの住むあたりを見ながら過ごしています。生駒山を、雲よ隠さないでください。雨が降ってもいいから

男１ 高安の女は、通ってこなくなった男に歌を贈った

女１ あなた、何？

女３ あなたこそ何？

女１ 私は

女３ 大和の方でしょう。知ってるわ

女１ だったら

女３ 下がってちょうだい

女１ え？

女３ あなたのお話は終わり。ここからは私の物語

女１ 何ですって？

男１ 物語は唐突に進む。細切れの物語がくるくるとめぐっていく

女３ あの人を愛しているのは、あなただけだと思った？

女１ あなたがそうだって言いたいの？

女３ あの人を愛した女はたくさんいるわ

女１ そんなの知ってる

女３ じゃあ見ててね。私の物語

男１ 昔、男がいた。その男を待っている女がいた

女２、登場。

女２ 久し振りだね

女３ 待ってたよ

女２ 元気だった？

女３ ええ、とっても

女２ しばらく来なかったから嫌われたんじゃないかと思ったよ

女３ 何それ？　ひどい

女２ ごめんごめん

女３ あなたは元気だった？

女２ ああ。あなたの顔を見たら元気になったよ

女３ 調子がいいのね

女２ いろいろと忙しくてね。なかなか来ることができなかった

女３ いいよ

女２ 寂しくなかった？

女３ 全然

女２ 本当？

女３ 本当よ

女２ 何だ

女３ がっかりした？

女２ うん、少し

女３ 少しなの？

女２ すごく

女３ すごくか

女２ 何？

女３ 本当は少し寂しかったの

女２ ごめん

女３ いいの。待っている時間も大切だから

女２ 待っている時間？

女３ 待っている間に、あなたのことを考えているの。それはとても大切な時間

女２ それは私も同じだよ

女３ 同じなの？

女２ いつもあなたのことを考えてる

女３ 本当に？

女２ 秋の野に　笹分けし朝の袖よりも　あでるぞひちまさりける

秋の野に笹を分けて帰った朝は袖が露に濡れるけど、それよりも会わないで寝る夜の方がずっと涙で濡れてしまうから

女３ 素敵な歌

女２ ありがとう

女３ あなたが歌うのは素敵な歌ばかり。そんな歌をもらえる私は幸せ

女２ 本当だったら髪飾りや反物を贈りたいんだけど

女３ そんな物いらない。あなたがいてくれるだけでいいの

女２ ずいぶん機嫌がいいみたいだね

女３ だって久し振りに会えたんだから

女２ そうだね

女３ 珍しい布を手に入れたの。あなたの着物を仕立ててあげるわ

女２ 本当に？　嬉しいな

女３ 女の務めですから

女２ ありがとう

女３ 今夜はずっといられるの？

女２ もちろん

女３ 明け方に帰ったら、の歌をくれる？

女２ うん。とびきりの歌を贈るよ

女３ 今から楽しみ

女２ もう帰ることを考えてるの？

女３ だって

女２ そんなこと考えなくていいよ。夜は長いんだから

女３ たくさんお話したいわ

女２ そうだね

女３ 一緒にいてね

女２ うん。一緒にいるよ

女２、退場。

男１ それが先月だったっけ？

女３ そう

男１ 今月は？

女３ 来られないんだって

男１ そうなんだ

女３ 残念だな

男１ 忙しいんじゃないかな

女３ わかってるよ、そんなこと

男１ 待ってるだけって大変だね

女３ それが女でしょ

男１ そうなの？

女３ 彼が来てくれるのを笑顔で待ってる。そういう女でいたいな

男１ そういうもんかな

女３ だって、男の人ってそういうの嬉しいでしょ？

男１ 俺はそういうのよくわからないから

女３ ダメな人

男１ まあいいよ

女３ せっかく女に生まれたんだから、女として恋愛を楽しみたい

男１ どんな風に？

女３ 雅な大人の恋愛。たまにしか会えないけど、お互いを思いやって、歌を贈ったり、物思いにふけったり

男１ そういうのって楽しい？

女３ とっても楽しい。彼から手紙が来るんじゃないかって、毎日楽しみなの

男１ そうやって楽しむんだね

女３ 待つことを楽しまなきゃ。ずっと待ってるから、会うときが素敵な時間になるの

男１ そうか

女３ それに彼、真面目だからさ

男１ そうかな？

女３ ちゃんと会いにきてくれるじゃない

男１ 今日は来なかったけど

女３ それはたまたま。手紙だってくれるんだよ

男１ まめな人だね

女３ 次はきっと来てくれる

男１ うん。そうだね。彼女はそうやって笑顔だった。次の月、彼はちゃんと来てくれた

女３ ほら、ちゃんと来てくれたでしょ

男１ よかったね

女３ うん

男１ どうだった？

女３ いっぱい愛してもらった

男１ そっか

女３ こんなこと言うの恥ずかしいな

男１ だったら言わなきゃいいのに

女３ 言いたいの。言わせてよ

男１ はいはい

女３ 彼ね、すごく優しかった

男１ うん

女３ 素敵な歌もくれた。やっぱり才能あるんだね。なんて言うのかな、発想が違うの。どうしてあんなこと思いつくんだろう

男１ すごく幸せそう

女３ すごく幸せ

男１ よかったね

女３ 次もちゃんと来てくれるかな

男１ 来てくれるよ、きっと

女３ そうだといいな

男１ 彼女はやっぱり笑顔でいた。そしてまた彼がやってきた

女２、登場。

女３ 今夜はずっといられるの？

女２ いや、今日は帰らなきゃいけない

女３ そうなの？

女２ ああ

女３ どうして？

女２ ちょっと忙しくてね

女３ 朝までいてよ

女２ 仕事があるんだ

女３ 明け方に去っていって、後朝の歌をくれるんでしょ

女２ ごめん、また今度

女３ 別の女の人のところへ行くの？

女２ そんなことしないよ

女３ でも通ってる女がいるんでしょ

女２ 忙しいんだ

女３ わかってる。私はたくさんいる女のうちの一人だってわかってるけど

女２ いつからそんなに聞きわけがなくなったの？

女３ いつからそんなに冷たくなったの？

女２ 冷たくなんかないよ

女３ 冷たいよ。昔はもっと優しかった

女２ 私は何にも変わってない

女３ 変わった。あなた、変わったわ

女２ 落ち着いて。ゆっくり話そう

女３ 飽きちゃったの？　私のことどうでもよくなったの？

女２ そんなわけないじゃない

女３ だったら

女２ ねえ聞いて

女３ 何？

女２ 必ずまた来るから

女３ 本当に？

女２ うん。必ずここへ帰ってくる

女３ 信じていいの？

女２ うん。だから待ってて

女３ じゃあ待ってる

女２、退場。

男１ 彼は帰ってくると言った。彼女はその言葉を信じた。彼はだんだん来なくなった。彼女から笑顔が消えた

女３ 先月、彼は来なかった。今月も彼は来なかった。昨日、手紙が来た。今日は手紙は来なかった。歌を贈った。返事が来た。また歌を贈った。返事はなかった。歌を贈った。返事はなかった。歌を贈った。返事はなかった。今日こそは来てくれると思ったけど、彼は来なかった

男１ 彼女は三年待った。だが、彼は帰ってこなかった

女３ どうして来てくれないんだと思う？

男１ 態度が悪かったんじゃない？

女３ そんなに悪かったかな？

男１ そりゃ、自分でしゃもじ持ってもりもりご飯食べてたら、幻滅するよ

女３ ご飯、好きなんだもん

男１ 全然お嬢様って感じじゃないでしょ

女３ 気を許しすぎたね。そういうときもあった

男１ だよね

女３ だから反省したよ。歌も贈ったよ

男１ でも来てくれないんだね

女３ 私ってそんなにダメな女？

男１ そんなことないと思うけど

女３ じゃあどうして来てくれないの？

男１ 態度が悪かったんじゃない？

女３ だから、それは反省したんだってば

男１ でも来てくれないんでしょ

女３ だからどうして？

男１ さあ？

女３ もういい。こんなこと繰り返してもう三年になるよ

男１ うん

女３ だからもういいの

男１ いいの？

女３ だって、私、結婚するんだし

男１ それでいいの？

女３ だって、三年も経ったんだから

男１ うん

女３ 三年も経ったら忘れてもいいよね

男１ でも、彼は忘れてないよ

女３ 忘れてるよ

男１ 忘れてない

女３ どうして？

男１ そういう人だから

女２、登場。

女２ こんばんは

女３ 誰？

女２ 私だよ

女３ あなたなの？

女２ そうだよ

女３ どうしたの？

女２ 帰ってきたんだ

女３ 三年も放っておいて？

女２ ごめん

女３ 帰ってきたのね

女２ 入れてくれない？

女３ ダメよ

女２ どうして？

女３ 私、結婚するの

女２ え？

女３ あなたとは違う人と結婚するの

女２ そうなんだ

女３ どうして帰ってきたの？

女２ 帰ってくるって言っただろ

女３ 三年も待ったのよ

女２ うん

女３ 私、ずっと待ってた

女２ うん

女３ どれだけ長い間待ってたかわかる？

女２ ごめん

女３ 帰って

女２ せめて顔だけでも見せてくれない？

女３ 顔も見たくない

女２ どうしても？

女３ あらたまの　年のを待ちわびて　ただこそすれ

三年という時を待ちくたびれてしまったの。今夜、新しい夫が来るわ。その人と私は枕をかわすの

女２ あさ弓　ま弓つき弓年をて　わがせしがごとうるしみせよ

かつて、私とあなたで幸せな時を過ごしたように、新しい夫と幸せに過ごしてください

女３ 今更そんなこと言うの？

女２ いけない？

女３ 私はあなたといても、ちっとも幸せじゃなかった

女２ ごめん

女３ 今更他の男と幸せになれると思う？

女２ そんなこと言わないで

女３ あさ弓　引けど引かねどむかしより　心は君に寄りにしものを

弓を引くとか、私の気を引こうとか、そんなことは問題じゃないの。昔から私の心はあなたに惹かれていたのに。待ってるのがこんなにつらいなんて知らなかった

女２ さよなら

女２、退場。

女３ 待って

男１ どうして追いかけるの？

女３ だって

男１ 顔も見たくないんじゃなかったの？

女３ だって

男１ もう会えないよ

女３ だって、私、ずっと待ってたのに

男１ 女は男に追いつけなかった。女は歌を詠んだ

女３ あ思で　れぬる人をとどめかね　わが身は今ぞ消え果てぬめる

私は愛していたのに、あなたは愛してくれなかった。去ってしまったあなたを引きとめることができなくて、私は今ここで消え果ててしまったようです

女１ それがあなたの物語？

女３ そうよ

女１ あなたはそのまま死んでしまったの？　それとも別の誰かと結婚したの？

女３ どっちがよかった？

女１ え？

女３ あなたの都合のいいように語ってあげる。だってこれは物語だから

【５】

女１と女２が男１を運んできて、ソファーに寝かせる。

女１ ありがとう

女２ 何でこんなことしてるの？

女１ ずっとベッドに寝てると飽きるじゃない？

女２ 寝てるのに飽きるとかないでしょ

女１ 寝たきりってよくないんでしょ。だからこうやって移動させてるの

女２ それでこの前もソファーにいたんだ

女１ 昼間はリビング。夜は寝室

女２ 一人じゃ運ぶの大変だね

女１ まあね。でも寂しいじゃない

女２ まあね

女１ よく寝てる

女２ 人の苦労も知らないで

女１ 起きないね

女２ うん。起きない

女１ このまま起きなかったらどうしよう

女２ そんなことあるの？

女１ わかんない

女２ そのうち起きるよ

女１ そうだといいけど

女２ 旦那さんとはどうやって出会ったの？

女１ え？

女２ 教えてよ

女１ 恥ずかしいな

女２ いいじゃない

女１ 大学のときにね、バイト先が一緒だったの

女２ 何のバイト？

女１ ファーストフード

女２ 彼の第一印象は？

女１ 変な人だった

女２ 変な人？

女１ 初めて会ったときね、この人は鏡の前で笑顔の練習をしてた

女２ ああ

女１ すっごい気まずかったの覚えてる

女２ 真面目なんだね

女１ 人前だと緊張するみたい。接客とか苦手なんだって

女２ だったらファーストフード向いてないじゃない

女１ そういうの克服したかったんだって

女２ 真面目だね

女１ 真面目。大学もね、文学部の日本文学科で、古典を専攻してて、何かこう、肩書きが古くさいじゃない

女２ あなたは何やってたの？

女１ 情報理工学部のマルチメディア

女２ 正反対だね

女１ 私とは絶対合わないと思った

女２ でも結婚したんでしょ？

女１ うん。何でだろう

女２ 自分にないものに惹かれるって言うしね

女１ そういうもんかな。でも、そんなに簡単じゃなかったよ

女２ 何が？

女１ 彼にはね、地元に残してきた彼女がいたの

女２ え？

女１ 毎月会いに行ってたよ

女２ 遠距離？　意外

女１ そう。意外だったの。普段は女っ気ないからさ。「彼女とか作らないの？」って聞いたら、「彼女は地元にいる」って

女２ 真面目で古くさいくせに。侮れんな

女１ そういう性格だからじゃないかな。遠距離で結構長いこと続いてたよ

女２ 木綿のハンカチーフの世界だね

女１ ？

女２ 知ってる？

女１ 大好き

女２ （歌う）恋人よ　僕は旅立つ　東へと向かう列車で　はなやいだ街で　君への贈り物　探す　探すつもりだ

女１ （歌う）いいえ　あなた　私は　欲しいものはないのよ　ただ都会の絵の具に　染まらないで帰って　染まらないで帰って

女２ 都会の絵の具に染まっちゃったんだね

女１ そういうことだね

女２ じゃあ、あなたが都会の絵の具なんだ

女１ 私？

女２ そう

女１ ええ

女２ だってそうでしょ

女１ 私が絵の具か

女２ 悪い女

女１ 私だって田舎の出身なんだけど

女２ 都会に出たら都会の女でしょ

女１ そういうもんか

女２ （歌う）恋人よ　君を忘れて　変わってゆく僕を許して　毎日愉快に　過ごす街角　僕は　僕は帰れない

女１ （歌う）あなた　最後の　わがまま　贈り物をねだるわ　ねえ涙拭く木綿の　ハンカチーフください　ハンカチーフください

女２ せつないね

女１ せつない

女２ いい歌

女１ ねえ

女２ 何？

女１ 私、そんなに悪い女じゃないよ

女２ そんなことないよ

女１ どうして？

女２ 略奪愛でしょ

女１ 略奪したつもりはないんだけど

女２ 男の心変わりを誘ったんでしょ

女１ そんなんじゃないよ

女２ 地元の彼女には悪いけどさ。終わりよければすべてよし

女１ それでいいのかな？

女２ いい

女１ 言い切ったね

女２ 言い切った

女１ 結婚してよかったのかな？

女２ よかったよ

女１ この人は？

女２ え？

女１ この人は私と結婚してよかったのかな？

女２ よかったんじゃないの？

女１ でも、私がいなかったら、地元の彼女と結婚してたかもしれないよ

女２ そんなこと言い出したらきりがないよ

女１ そうだけどさ

女２ その彼女とはどうして別れたの？

女１ 遠距離がつらくなったって言ってたと思う

女２ そうだよね。離れてても好きでいつづけるって大変だと思う

女１ うん

女２ じゃあ、あなたのせいで別れたんじゃないでしょ

女１ でもきっかけにはなったかも

女２ それは結果的にそうなっただけだから

女１ そうなんだけど

女２ 後悔してるの？

女１ 何を？

女２ 結婚したこと

女１ ううん

女２ じゃあ

女１ でも、この人はどうなのかな。後悔してないかな

女２ それは聞いてみないとわからないけど

女１ 私がいなかったら全然違った人生だったかもよ

女２ 何？　違う人生がよかったの？

女１ そうじゃない。私じゃなくて彼の話

女２ 同じでしょ

女１ 違うよ

女２ 何が違うの？

女１ 私は満足してる。彼に出会ったことも、今こうしていることも。後悔なんかしてない

女２ だったらいいじゃない

女１ 不安なの

女２ 不安？

女１ 自信がないの。彼にとって、本当に私でよかったのか

女２ 付き合ってすぐならそういうのもわかるけど。今さらそんなこと言ったって

女１ じゃあどうして眠ったままなの？

女２ それ、何か関係あるの？

女１ どうして彼は夢ばっかり見てるの？　私と一緒にいるのが嫌なの？

女２ 私に聞かないでよ

女１ じゃあ誰に聞いたらいいの？　答えてくれないんだもん

女２ 私にはわかんないよ

女１ このまま起きなかったらどうしよう

女２ 大丈夫？

女１ 結構つらいんだよね。待ってるだけって。起きないかなって、ずっと待ってるんだけど

女２ 気分転換しようよ。どっか出かける？

女１ ううん、いい

女２ どうして？

女１ 目が覚めたときに、誰もいないと寂しいでしょ

女２ そうだね

女１ だから私は待ってる

女２ うん

女１ ねえ、そろそろ起きてよ。私、ずっと待ってるよ。声、聞かせてよ。寂しいんだよ。目、開けてよ。あなたがいないと私、寂しくて死んじゃうから。ねえ、起きて

【６】

夢の中。

男１と女２がいる。

男１ 昔、男がいた。その男が伊勢の国に狩の使いに行ったときのこと。男は美しい女に出会った

女１、登場。

女１ こんばんは

女２ こんばんは

男１ 女は伊勢で神に仕えるであった

女２ 来てくれたんだ

女１ うん。来たよ

女２ ありがとう

女１ 何してたの？

女２ 昔のことを思い出してた

女１ 昔のこと？

女２ 昔、会えなかった人のこと

女１ 聞かせて

女２ いいよ

男１ それは年が明けたばかりの頃、梅の花ざかりの頃

女２ いなくなってしまった人がいたんだ

男１ 月が明るく照らす夜のこと

女２ その人が住んでた家に行ってみた

女１ それで？

女２ そこにはもう誰もいなくて、景色だけは変わらなくて

男１ 立っては見て、座っては見るけれど、去年とは似ても似つかない

女２ それで歌を詠んだよ

女１ どんな歌？

女２ 月やあらぬ　春や昔の春ならぬ　わが身一つはもとの身にして

男１ 月が昔のままの月でない。春が昔のままの春でない

女２ そんなことがあるだろうか。私だけが昔のままで

女１ 寂しい歌ね

女２ うん

女１ でも、いい歌

女２ ありがとう

女１ その人とは結局どうなったの？

女２ こっそり連れ出したりもしたけど、どうにもならなかった

女１ それっきり？

女２ それっきり

女１ そう

女２ 昔の話だよ

女１ でも、あなたは待ってるのね

女２ え？

女１ その人が来るのを待ってる

女２ 違うよ

女１ 違うの？

女２ 今日はあなたが来るのを待ってた

女１ そう言ってもらえるだけで私には十分

女２ 来てくれてよかった

女１ 夜が明ける前に帰らなきゃいけないの

女２ わかってるよ

女１ 月が綺麗ね

女２ 月から迎えが来るんでしょう？

女１ ええ。のを着て、月へ帰るわ

女２ かぐや姫みたいに？

女１ 今はとて　天の羽衣きるりぞ　君をあれと思いでける

今はもうお別れと天の羽衣を着るときに、あなたのことをいとおしく思い出しました。お別れをするときに、大切な人だったって気付くの

女２ 目には見て　手には取られぬ月のうちの　のごとき君にぞありける

目には見えていながら手に取ることができない、あなたは月にある桂の樹のようだ

女１ それは月にあるという桂の樹の話？

女２ そう。月には大きな桂の樹が生えている

女１ 不思議な話

女２ 本当に帰ってしまうの？

女１ 私は神に仕える身だから、恋はできないの

女２ うん

女１ でも、私だって女だから。だから今夜だけ。いいでしょ？

女２ うん。いいよ

女１ 私ね、夢を見たの

女２ どんな夢？

女１ 私の部屋にあなたが訪ねてくるの

女２ うん

女１ 最初はケンカしたりするんだけど、とても仲良くなって、いろんな話をした

女２ どんな話？

女１ 昔の思い出とか、恋の相談とか

女２ そうなんだ

女１ それから彼がいた

女２ 彼？

女１ 彼は眠ってた。ちっとも起きないの

男１はいつの間にか眠っている。

女１ 君やし　われやきけおもえず　夢かうつつかてかさめてか

あなたが来てくれたのか、それとも私が会いにいったのか、よくわからないの。夢なのか本当なのか、眠っていたのか、目が覚めていたのか

女２ よく眠ってる

女１ ひどい人。夢の中でも眠ってるのね

女２ そのうち起きるよ

女１ そうね。起きたら三人でお話しましょ。それで眠くなったら手をつないで眠るの。そしたら夢の中でまた会えるから

女２ うん。そうだね

【７】

女１がいる。男１がソファーで眠っている。

女２が窓の外に現れる。

女２ とんとんとん

女１ 誰？

女２ 私。開けて

女１は窓を開ける。女２は部屋の中に入る。

女２ こんにちは

女１ こんにちは

女２ 今日もいい天気だよ

女１ そうだね

女２ 旦那さん、まだ眠ってるの？

女１ うん

女２ 気持ちよさそう

女１ 夢でも見てるんじゃない？

女２ どんな夢？

女１ さあ？　何か飲む？

女２ カフェオレ

女１ わかった

女１はカフェオレの用意をする。

女２ 昨日は夢を見た？

女１ うん、見たよ

女２ どんな夢だった？

女１ 今度はね、伊勢の斎宮の話

女２ 伊勢の斎宮って何？

女１ 伊勢神宮で神に仕える女性

女２ ふーん

女１ 私ね、わかったんだ

女２ 何が？

女１ 私、この人が好き。どうしようもなく好きなの

女２ うん

女１ いまさら何言ってるんだって思うでしょ

女２ それ、言ってて恥ずかしくない？

女１ うん、恥ずかしい

女１はカフェオレを持ってくる。

女１ はい、カフェオレ

女２ ありがとう

女１ 一生のうちに、何人の人を好きになると思う？

女２ さあ？　どうだろうね？

女１ この人の他に好きな人だっていたんだよ

女２ そうなの？

女１ 私のこと好きだって人もいたんだから

女２ 本当に？

女１ 本当だよ。そりゃあもう数え切れないぐらいたくさん

女２ 嘘。そんなにいないでしょ

女１ 初恋はいつ？

女２ 幼稚園？　小学校？

女１ ほら。そんな頃から恋愛してるんだから

女２ でもそれって恋愛って言えるの？

女１ だってそのときは真剣なんだよ

女２ 確かにね

女１ 格好良い先輩とかさ

女２ うん。いたいた

女１ ずっと見てるだけなの

女２ でも、手紙書いたり、お菓子作ったり

女１ で、結局渡せなかったり

女２ 乙女心ですな

女１ ときめいたりね

女２ 落ち込んだり悩んだり

女１ 笑ったり泣いたり

女２ お化粧したり

女１ ダイエットしたり

女２ そうそう

女１ だからきっといた。私を好きでいてくれた人。告白はしてくれなかったけど、そういう人がたくさん

女２ そうだね

女１ 思い出を作り直してるの

女２ 思い出を？

女１ 私の人生、いろんなことがあったけど、それを全部自分の都合のいいように作り直してるの

女２ そんなことしていいの？

女１ いいよ。だって私の思い出だもん

女２ ま、そうだけど

女１ 私には好きな人がたくさんいて、私のことを好きな人もたくさんいて、その中で私はこの人を選んだの

女２ うん

女１ この人は私を選んでくれた。それってすごいことじゃない？

女２ そうだね

女１ この人が在原業平じゃなくてよかった

女２ どうして？

女１ だって、そんなにいろんな人と恋愛してたら、嫉妬するじゃない

女２ 自分はいいの？

女１ 私はいいの。私はいろんな恋をして、最終的にこの人を選んであげるの

女２ 偉そう

女１ そのぐらいでなきゃ釣り合わない。私のこと放っておいてずっと眠ってるんだから

女２ もうすぐ起きるよ

女１ え？

女２ もうすぐ目が覚める

女１ 本当？

女２ うん。で、私たちはお別れ

女１ どういうこと？

女２ 私、もうここには来ないから

女１ どうして？

女２ 旦那さんが起きたら、私は邪魔でしょ？

女１ そんなことないよ

女２ 旦那さんと幸せにね

女１ ちょっと待ってよ

女２ 私たち、友だちになれた？

女１ それは違う

女２ え？

女１ 私たちは、ずっと前から友だちだった。私はそう思ってる

女２ それ、自分で勝手に決めたの？

女１ そうだよ

女２ 変なの

女１ これからもずっと友だちだと思ってる

女２ ありがとう

女１ ありがとうなんて言わないで。ね、そうでしょう？

女２ 私にはわからない

女１ そうだって言ってくれるだけでいいの。そうだって言ってよ

女２ できないよ、そんなこと

女１ 同じこと思ってよ。友だちだったら、私と同じこと感じてよ

女２ それ、すごい要求だね

女１ え？

女２ 自分と同じこと考えてほしいって

女１ 私はわがままなの

女２ 何か、嬉しい

女１ そうやって言ってくれると、私も嬉しい

女２ もう行かなきゃ

女１ もう行くの？

女２ うん

女１ どうしても？

女２ どうしても。カフェオレごちそうさま

女１ また会える？

女２ あなたが寂しそうにしてたら、また来るかも

女１ 待ってる

女２はベランダから飛ぶ。

女１ ねえ起きて。そろそろ起きる時間だよ。目を覚ましてよ。でないと私、寂しくてどっか行っちゃうよ。ねえ、起きて

女１は男１と手をつなぐ。

女１ 手をつないで眠ったら、同じ夢が見られるんだって

女１は眠る。

終わり。

【参考】

・「伊勢物語」

・「木綿のハンカチーフ」